



くりから御殿

神無月末のよく晴れた朝、口入屋の灯庵とうあん老人が三島屋に乗り込んできた。

日差しはあっても襟元からしんしんと冷えるような日和だというのに、明神下の店からこの三島町まで歩いてきただけで、灯庵は汗ばんでいる。脂っこい外見と粘っこい物言いで、三島屋では「蝦蟇がま仙人」と仇名あだなされている人だが、本当に暑さ寒さを超えてしまう仙術を体得しているのかもしれない。

「変わり百物語の新手のお客さんを紹介にあがったんですがね」

伊兵衛いへえの居室で長火鉢をあいだに向き合い、脇に座したおちかに一瞥いちげつをくれてから、蝦蟇仙人は切り出した。

「先様から、ちと注文がありましたな。語り手には内緒で立会わせてもらいたいというんですよ」

おちかは伊兵衛と顔を見合わせた。

「内緒と申しますと？」

「ですから立会人が、黒白の間で語り手が語っているのを、こっそり見ていたいというんですがな」

まだ不得要領の表情の伊兵衛に先んじて、おちかは言った。「お話を盗み聞きしたいということでしたら、お断りいたします」

灯庵老人の、白目の濁った目玉がどろんと動いた。

「お嬢さん、ハキハキものを言うのがあんたの売り物かしらんが、世間様のお買い求めになるものは違います」

若い娘は素直が一番、という。

「そこんところをよく心得ておかんと、あんた一人だけ歳をとらんわけじゃなし、あつという間に嫁い後家になりますわい」

今度は伊兵衛がおちかより先に言った。

「灯庵さん、話が逸れてますよ」

「今のは話じゃござんせん。格言です」

反っくり返ってうそぶくと、ますます蝦蟇めおとに似て見える。

「今度の語り手と、立会人は夫婦めおとです」

夫が語り手で、立会いたいという人が妻なのだ。

「旦那さんの話を、おかみさんの方はよく知つとります。何度も聞いておりますからな。今さら

盗み聞きなんぞするはずもない」

それなら最初はなからそう言ってくればいいのだ。この意地悪な蝦蟇仙人め。

「旦那さんは大病から治ったばかりでしてな。まだ油断がなりません。おかみさんとしちゃあ、見ず知らずの三島屋さんで一人にするのは心配だ。話の途中で具合が悪くなることもあるかもしれんでしょう」

だから、こっそり様子を見ていたいというのだった。

「よござんしょうか」

「それなら、是非もないでしょう」

「では八ツに。おかみさんは旦那さんより早めにこちらさんに伺うよう、手配しておきますわい。うちの大事なお客さんですんで、粗相のないようお願いします」

言い置いて、灯庵老人が引き上げると、伊兵衛は首をかしげた。

「あの人にとっちゃ、うちもお客だと思うんだが、粗相のないようにという言い様はどんなもんかね」

そういう台詞は、蝦蟇仙人がこの場に居るとき口にしないとイケない。後で言うのは弱腰じゃあるまいか。

「あつという間に嫁ず後家という言い様も、どんなもんでしょうね」

叔父と姪はまた顔を見合わせた。二人のあいだを、小さな苦虫がぶうんと飛んでよぎったようである。

「おかみさん」は、陸りくと名乗った。

「どうぞよろしくお願い申し上げます」

この変わり百物語では、なにしろ話の内容が内容だから、名前や地名など、語り手が伏せておきたいことは伏せておいてかまわない。語り手自身の素性も同様である。が、お陸にそれを気にするふうはなかった。灯庵の上客であることをふりかぎすふうもなかった。蝦蟇仙人よりずっと温和で、親しみやすい人だった。

お陸と夫の長治郎せがれは、横山町一丁目にある白粉問屋「大坂屋」の主あるじである。いや、主だった。この月の初めに倅せがれ夫婦に代替わりをして、お披露目も済ませたところだという。

「ですから主人もあたしも、もうただの爺婆じいばなのでございますよ」

二つになる孫の可愛いことを、花の咲いたような笑顔で語るお陸だから、確かにそこそこの歳のおばあちゃんなのだろうけれど、外見は若やいでいる。色白なのも人目を引くほどだ。やつぱり、商いものが効くのだろうか。

おちかはお勝と二人、黒白の間の隣の小座敷でお陸と向き合っていた。間もなく大坂屋長治郎がやってきて、黒白の間でおちかと語らうあいだ、お陸はここにひそんでいることになる。

「お窮屈ではございませんか」

本来、客を座らせるような場所ではないから、おちかもお勝も気に病むのだが、お陸はかえって喜んでいて。

「なんですか、読み物に出てくる間者にでもなったような気分でございますわ」

はしゃいでみせてから、また恐縮する。

「本当なら、立会いなどいけませんでしように、ご無理を申し上げて相済みません」

立会人を入れるのはおちかにも初めてのことであるが、無理しているわけではない。十人も二十人も見物人が来るというのでは困るが、お陸一人だ。それに事情が事情である。

「旦那様は、だいぶお身体の方が」

控えめに問いかけるお勝に、お陸はあっさり打ち明けた。

「葉月の始めに、死にかけましたの。朝から妙に背中が痛いし、胸苦しいと言っていたかと思ったら、みるみる顔が真っ白になって、倒れましてね。心の臓の病でした」

「それは大変でございましたね」

「三途の川を途中まで渡りましたわ。でも戻って参りました」

ちょうど彼岸の入りだったそうだ。

「あの世の皆さんが、ついでに主人も連れて戻ってくださいったのかもしれない。こんなに急じゃ何だから、いっぺん帰りなさいと」

あの世の皆さん。ご先祖様とか先に逝った両親とかいう言い方ではなく、〈皆さん〉。その言葉にはもの悲しいような響きがあって、おちかの耳にとまった。

また同じようなことがあったら、今度は三途の川を渡りきってしまうだろうと、医師から言い渡されているという。

「ですからその前に、語り置いておきたいのでしよう。今まではわたしばかりが聞き手で、主人も物足りなくなったのかもしれない。他人様よそさまでお聞かせするようなお話ではないんですけれど……」

おちかは言った。「そういうお話をお聞かせいただくのが百物語でございます。お気兼ねは要りません。おかみさんも、どうぞおくつろぎくださいませ」

「ご用がございましたら、わたくしが何なりと承ります」と、お勝も頭を下げる。

不意にお陸が涙ぐみ、あわてて袖で目元を押さえた。そうやってうつむくと、髷のてっぺんに白髪が目立った。銀糸混じりの博多帯はたおびによく映る、これまた美しい白髪である。

「ありがとうございます」

礼は述べても、お陸は涙の理由を言わなかった。おちかもお勝も問わなかった。それはこれから、黒白の間で、長治郎の口から語られることだろう。

鯉のぼり。

てんで季節外れだが、おちかはそう思った。大坂屋長治郎である。この人の顔が鯉のぼりに似ているのだ。

目がぎよろりと大きい。口も大きくてくちびるが分厚い。だが、そういう顔つきによくある暑苦しい感じはなくて、どことなく愛嬌がある。

身体は痩せていた。顔色もくすんでいる。命取りの大病の虎口こゝろから危うく逃れたが、今もその

虎の鼻息がかかるくらいのところにいる——と、お陸の話の聞いていなくても、おちかにもそう察しがついたであろうくらいぢの寡ぢれが身にまといついている。

だがその口調は優しく、声音は温かみを帯びていた。お陸とは似たもの夫婦と言おうか。どんな人でもすぐ打ち解けて、明るくやりとりすることができる。根っからの商人あまんどとは、商売っ気のあるなしではなく、こういうことを指して言うのではなからうか。

「こちらの変わり百物語のことを灯庵さんに聞いたときには、てっきりあの人一流の面白い作り話かと思いましたが」

蝦蟇仙人は、お客に作り話をするところがあるらしい。三島屋では誰もそんなもてなしを受けたことがない。

「お嬢さんは、趣味人の叔父さんを持たれましたなあ」

「はい。趣味人かどうかは怪しいですが、いろいろと面白可笑おしい叔父でございます」

長治郎も、自分の名前やお店のことを隠そうとはしなかった。病のこともする語った。先に聞いて知っていることを、初めて聞いたような顔をして聞き入るのは存外難しいというか、後ろめたいものである。

「——という次第で、いっお迎えが来るかわからない身の上になりました」

つい昔語りをしたくなりましたと、長治郎は言う。着物の肩口や腹まわりの皺の寄り方から見て、病んで倒れる以前はかなり太りじしの人だったようだ。この鯉のぼりそっくりの顔が丸く太った身体の上に乗っていたら、いっそう人なつっこい風情であつたらう。





「これまで、手前がこの話をしたのは家内だけでございます。あれには繰り返し話して聞かせましたから、耳に胼胝たごができているかもしれない」

当のお陸は、唐紙の向こうで今もまた静かに聞き入っているはずである。

「思い出すと、語らずにはおられませんでな。四十年も昔のことなのに、昨日見た夢のようにくつきりとしているのですよ」

昨日の出来事のように——ではない。昨日見た夢のように、だ。

「ただ、夢の話というのは大方がそうでございましょうが、あれがああしてこうなるとどのつまりはこう落ち着いてという、めりはりのあるお話ではございません。筋も通っておりませんか、本人には面白くても、聞かされる方にはつまらない。ですから、いつも家内に相手になってもらっております」

「今日はわたくしがお伺いいたします」と、おちかはにっこりした。「夢のお話でも、夢のようなお話でも、変わり百物語には有り難い耳の宝でございませう」

でも大坂屋さんと、おちかは空とぼけて問うてみた。

「ずっとこのお話の聞き手になってこられたおかみさんが、今日はご一緒でなくてよろしいのでしょうか。その方がお話しになりやすいようでしたら、わたくしどもでは一向にかまいませんのです」

長治郎は分厚いまぶた瞼をゆっくりとまたたくと、軽く首を振った。

「いえ、今日は家内がおらん方がよござんす。あれの耳の胼胝を休ませてやらんと」

「そう思い決めて参りました、という。」

「家内はこの話に慣れきっておりますし、手前の気持ちをおもんばかって、いつも優しいことを言うてくれます。もう何十年も、そうやって手前に付き合ってきてくれました。手前もそれに甘えて過ごして参りました」

鯉のぼりの顔に、影がさした。

「しかしお嬢さん、これはそんな甘やかな話ではないのかもしれない。今さらへかもしれない。だから一度、いい加減な言いぐさですが、手前にはそう思えてなりません」

だから一度、他人の耳で聞き取ってほしいのだと、長治郎は言った。

「ずいぶん前からそう思っていたのですが、そんな都合のいい機会などあるもんじゃございませぬ。実は手前は、以前に何度か百物語会に混じったことがあります」

大勢の人が集って順繰りに怪談話を披露するという、本式の百物語会の方だ。そういう場では百本の蠟燭を灯し、一話が終わると一本の蠟燭を吹き消す。そうして百まで語り終え暗闇が訪れると、なにがしか怪異が起こるといふ。

「いぎとなると、たくさんの人の前では、臆してしまつて語れませなんだ。手前の話など、いかにも嘘くさく聞くこえそうでしたし」

語りの本番に入る前に、自分の話がへんてこであることや、つじつまが合はずぎているとか合わなすぎているとか、とかく言い訳してしまう。怪異を語る人には珍しくないことだ。が、それにしても長治郎の顔にさす影が濃くなってゆくことは気にかかる。

おちかは茶目っ気を出してみせた。「どんなお話でもわたくしは驚きません。これでも百戦錬磨——とはとうてい申せませんが、いくつもの不可思議なお話を聞き取って参りました。ですから大坂屋さん、わたくしにちよつとあてものをさせてください」

「あてもの？」

「はい。大坂屋さんのお話の芯がどんなものか、わたくしが首尾よくあてましたなら、お褒めの言葉をいただけますか」

「はあ、それはもちろん」

鯉のぼりの大きな目玉が泳いだ。

「ではお尋ねいたします。そのお話には、もののけが現れますか」

「もののけ——と申しますとその、妖怪変化の類いですな」

「はい」

「それは、違いますなあ」

「では、神隠しの類いでしょうか」

「いえ、まったく違います」

「失せ物にまつわるお話ですか」

「それも外れ」

分厚い掌てのひらを、いえいえと振ってみせる。

「古い器物、楽器とか掛け軸などにまつわる怪談でしょうか」

「いやいや違います」

「鄙ひなのお話でございますか。山中深くで起こる怪異とか、海に現れるあやかしとか」

「お嬢さんはいろいろなお話を聞いておられるのですなあ」

鯉のぼりに、少し笑みが戻った。

「確かに、手前の話の舞台は山のなかでございしますが」

「まあ！」

「しかし、お嬢さんがおっしゃるのは山川草木の怪という意味でしょう。でしたら違います」

「外れでしたか」

「おちかが口をへの字に曲げてみせると、長治郎は目を細めた。

「これは手強うございます。わたくしも本気を出さなくては」

指で顎の先をつまんで、おちかは少し考え込んだ。

「では、お化け屋敷ではいかがでしょうか」

返事がない。目を上げてみると、長治郎が鯉のぼりの大きな目玉をさらに瞠みはって、だが驚くのではなく、放心したような顔になっていた。

「大坂屋さん」

声をかけると、重そうな臉が動いた。

「さいですな」と、長治郎は一人で何度もうなずいた。「手前も今の今まで思い当たりませんでした、さいです、手前の話はまさにお化け屋敷ものでございましょう」

但し、と身を乗り出すので、おちかも座り直して「はい」と応じた。

「化け物が出る屋敷じゃありません。屋敷そのものがくるくると姿を変え——化けるんです、ございます」

今日のお茶請けはきんつばである。塗りの小皿に品よく載せられたそれに目を落として、大坂屋長治郎は話を始めた。

「手前は上方の生まれでございます。難波湊からもう少し西へ下った小さな漁師町で、両親は〈三ツ目屋〉という屋号の干物問屋を営んでおりました」

海に近く、すぐ後ろに山並みを背負い、お椀を伏せたような形のいい入り江に面した町は、網元の屋敷のなまこ堀に日差しが明るく映える、美しいところであったという。

「手前の父方の縁者は、今もそこで干物問屋を続けておりますので——」  
「では、町の名前は三島藩城下の三島町でいかがでしょうか」

おちかの合いの手に、長治郎はうなずかない。困ったような顔をした。

「お氣遣い有り難うございます。しかし、昔語りのなかの仮の名前とはいえ、三島屋さんの屋号を使わせていただいてよろしいかどうか」

験げんが悪うございますからと、気兼ねする。

「それというのも、手前が十歳の春、あれもまさに彼岸入りの日でございますでしたが、この町では大変おそろしいことが起こったものでございますから」

五日も続いた長雨の挙げ句、町のすぐ後ろに迫る山の何カ所かが山津波を起こし、家々を押し潰して、大勢の人びとの命を奪い去ったのだという。

「海山に挟まれて、平地の少ない町でございました。町家はみんな軒先を寄せ合うようにして立ち並んでおりました。そこに山津波が押し寄せたのですから、ひとたまりもありません」

春の長雨はどこでも珍しいことではないが、その年の雨は格別で、雲はいつまでも低く、降っても降っても雨脚は弱まらず、柄杓ひょうくの底を抜いたかのような降りようで、

「漁師の古老たちが、こんな雨降りを見たことも聞いたこともない、用心せねばと案じていた矢先の出来事でございました」

山津波は夜明け前の薄闇のなかで起こった。泥流は町の三割方を押し潰し、海まで押し流してしまつたというから凄まじい。百物語の怪奇譚とはまったく別の怖さに、おちかも身が縮むようだった。

「手前はまだ子供でございましたから、これはあとあと知った話になりますが、その二年ほど前から藩では山の開墾に手をつけておりましてな。手前のふるさと——」

「はい、どうぞ三島町でかまいません」

験など気にするより、長治郎が語り易いことの方が、おちかには大切だ。

「三島町でも、代官所から作事のお触れがありまして、人を集め、森の木々を次々と切り倒し、畑をこしらえておりました。それが災いしたようなのです」

それまでは、かなりの大雨が降っても山の森が水の流れを食い止めてくれていたのだ。その山

が赤裸になつては、若を失つたやうなもので、大水に抗することができなかつた。

「少しでも藩の内証をよくしよう、領民どもの暮らしを豊かにしようとした開墾でございましたから、いつそう悲しい災厄でございました」

魚だけとっておればよかつたのだ、山に手をつけたから土地神様のお怒りに触れたのだと、町の人びとは恐れ戦き、生き残つた人びとが代官所に押しかけるやうな騒動まで起こつたやうである。

「お辛いことでしたね……」

「四十年も昔のことでごさいますよ」と、長治郎はおちかを慰めるやうな目をした。

「三島町も小さな町ながら、問屋通と呼ばれる通りがございましてね。干物や俵物を扱う問屋が寄り集まつておりました。手前の家もそのなかの一軒でした。そもそもは、港の側から数えて三つ目の干物蔵のあるお店だつたことが、屋号の謂われでございまして」

問屋通で軒を接するお店の人びとは、ただ商売仲間であるというだけではなく、家族ぐるみで代々の付き合いで、互いに嫁取り婿取りもあり、固く結びついていた。山津波は、まるで遺恨でもあるかのように、そこをめぐらけて襲いかかり、すべてを根こそぎに奪つていった。

「なに、山に善心も悪心もあるわけもなく、たまたま場所が悪かつたのでしようが……」

たまたま。おちかには心のなかで繰り返す。そう、偶々なのだ。たまたまが、人に酷い仕打ちをする。

「手前はあのころ、まだときどき寝小便を垂れる癖がございましてな」



長治郎は小声になる。

「あの朝も、布団が冷たくて、早くに目が覚めていたんでございます。家の者たちはまだ起き出す前でございました」

濡れた布団が見つつかれば、母親や女中たちに叱られる。ただ寝小便を垂れてしまっただけでも恥ずかしいのに、それを大声で咎められたら、いや気にするなど慰められても、なおさら身の置き所がなくなる。

「子供の浅知恵で、ともかく隠してしまおう、どこがいいかと布団を抱えて廊下をうろうろしているときに、ただならない地響きを聞きつけました」

とつさに、誰かが「ああ大変だ、みんな逃げて、表へ逃げて！」と叫んだのを覚えているという。

「暗くて姿は見えませんが、あれはたぶん、うちでいちばんの早起きだった女中頭でしたろう」

長治郎は庭先へ飛び降り、後も見ずに逃げ出した。ともかく広いところへ逃げた。抱えていた布団をどこで手放したのか覚えていない。気がつけば雨と泥水でずぶ濡れになり、どこかの知らないおじさんに抱えられていた。そのおじさんが長治郎を抱えたまま、さらに半町ばかり走って逃げてくれた。

「手前は一人、命を拾いました。寝小便に救われた命でございませす。そして、十で孤児みなしごの身の上になりました」

長治郎の両親は亡くなった。二人の亡骸は、潰れたお店の残骸の下になっていた。三ツ目屋の奉公人たちや、近隣の人びとも同じようにして命を落とした。

おちかはず黙つてうなずいた。どんな言葉もかけようがない。

「手前は一人息子でございましたが、問屋通には、赤ん坊のころから一緒に育つた従兄弟姉妹や幼なじみがおりました」

とりわけ仲良しの女の子が二人と、男の子が一人いた。四人はいつも、寺子屋に行くのも湯に行くのも一緒、しょっちゅう互いの家を行ったり来たりしていた。

「女の子がみいちゃんとおせんちゃん。男の子がはっちゃん」

かすかに節回しをつけて歌うように、長治郎はその子らの名をあげた。

「その三人も、揃つて行方がわからなくなつてしまいました」

両親や他の大人たちとは違い、仲良しの子供らの亡骸は、なかなか見つからなかった。身体が小さいから、瓦礫のなかに埋もれてしまったのかもしれない。あるいは遠くまで流されてしまつたのかもしれない。

だが、ひよつとしたらどこかで生き延びているのかもしれない。怪我をして動けなくて、どこかで養生しているから、すぐには会えないだけなのかもしれない。

それを待みに、長治郎は、お救い小屋で犬の子のように震えて過ごした。一日待てば、二日待てば、親しい人がやってくるかもしれない。三日経てば、誰かが長治郎の名を呼んでくれるかもしれない。ひたすらにそう願ひながら幾夜を送つた。



その願いは空しかった。長治郎はずっと独りぼっちのままであった。

「山津波の後、ようよう雨は降り止みましたが、町は町の体をなしておりませんでしたし、港も船も使えません。そちらを早く何とかしないことには、生き残った者たちも飢えと冷えて参ってしまいます。とりわけ子供や年寄りには、代官所の差配でのお救い小屋暮らしは厳しくなる一方でございますました」

町には眼病が流行り始め、水が濁ったせいお腹を下す人びとも増えてきた。

「そこで網元さんが、町の北の山にある別宅を開けてくださいましてね。まず手前のような孤兒や年寄りなど、弱っている者たちが二十人ばかり、そちらへ移ることになりました」

山の別宅はもともと網元の家の隠居所で、町の人びとはへおかどさんの山御殿と呼んでいた。へおかど」というのは、この地方で金持ち・物持ちを指している呼称だが、三島町では網元のことと決まっていた。

「古いお屋敷でしたが、山のなかの家だというのに、お寺さんのような立派な瓦葺きでしてなあ。隠居所でさえ、それを許されていたのです。江戸の方には不思議でしょうが、漁師町では、網元というのはそれくらいの権勢があるものなんでございますよ」

鯉のぼりの大きな目玉に淡い光が宿る。  
「わたらのおかどさんはやっぱりお大尽やなあと、あんなときでも誇らしく、頼もしく思ったものでした」

ここで皆を待とう。誰かが聞きつけて、迎えに来てくれるかもしれない。仲良しの三人も、後

から来るかもしれない。

「おかどさんの山御殿は大きゅうてね、いっぺんには巡りきらないくらい、たくさんの座敷がございました。母屋と離れのあいだを渡り廊下でつないであって、その下には湧き水の溜まった丸い池がありました。大雨のせいか、すっかり濁ってしまったって、目の下一尺もあるような大きな鯉が、腹を見せて浮いていたのを覚えております」

長治郎たちにあてがわれた座敷は離れにあり、煮炊きには井戸の水を、水浴びや洗濯には池の水を使うことが許された。子供ながらも、怪我や病に弱っていない長治郎は、一日のほとんどを水汲みと薪割りで過ごした。

「そうやってお手伝いをしていると、気が紛れたんでございますよ。じっと座って膝を抱えていると、ただもう悲しゅうて悲しゅうて涙ばっかり流れます。それじゃあ目玉が溶けてしまいますからな」

それでも、たった十歳の男の子だ。語る長治郎の臉の震えが、本当は目玉が溶けても泣いて泣いて泣いていたかったと告げている。

「山御殿から町を見下ろすと、毎日毎日、焼き場から煙が漂いのぼって、海の方へと吹き流されていききました」

五十の隠居になった長治郎は、臉を震わせながらも、今もまた乾いた目で語っている。

「同じ座敷で寝起きしていたおばあさんが、どこぞで曆を手に入れてきて、壁に貼ってくれました。手前はそれを見ては、山津波から何日経ったか、山御殿に来て何日過ぎたか、数えておりま

した」

だから、あれはおかどさんの山御殿に来て五日目の朝だったと、はっきり覚えていた。

「目を覚ましたら、家に帰っておりました」

「は？ と、おちかか声に出さずに目だけを瞠って問いかけた。長治郎もおちかの目を見て、ゆっくりとひとつうなずいた。

「目が覚めたら、そこは問屋通の家だったんでございます。両親と川の字になって寝ていた座敷でございました」

両隣の父母の布団は上げてあり、長治郎だけが寝坊したような恰好だった。

「手前は起き出して、目をこすりました。何度見直しても、うちでございませぬ。母の枕も、父の夜着も、手前がよく知っているものでございました」

思わずがばりと伏して母の枕を嗅いでみると、懐かしい髪油の香りがした。

「前後を忘れて、手前は座敷を飛び出しました。廊下に出ると、裏庭が見えました。沓脱石の脇に、父が去年の夏祭りに夜店で買った、蝦蟇の焼き物が置いてありました」

廊下の曲がり方も、ひとつ先の座敷の障子のいちばん下の升に穴が空いていることも、何もかも懐かしい我が家であった。

だが、誰もいない。人の気配はない。ただうらうらと、長閑で暖かな春の朝日が差しかけているだけである。

勝手知ったる我が家のなかを駆け回りながら、長治郎は思った。これは夢だ。潰れて失くなっ

てしまったうちの夢を見ているのだ。

「人の姿はありませんが、気配はあるんでございます。つい今し方までそこに誰かいたような」  
長治郎が手を上げ、「そこに」と指さすような仕草をしたので、おちかもそれを目で追った。  
たまたまだろうけれど、大坂屋の隠居が指さした先は、お陸がお勝に付き添われて潜んでいる場所だ。

「たった今、手前が目をやってそちらを見るまでは、確かに誰かおった。どこだ、どこだと走り回り、ぐるぐる見回すうちにも、その誰かの影がすうっと動いて消えるのが、目の隅に残るようでした」

台所にも火の気はなかったが、味噌汁の匂いが漂っていた。長治郎は土間に飛び降り、竈かまどの上の鉄鍋の木蓋に手をかけた。

そのとき。

——長坊。

「どこからともなく、声が聞こえてきたんでございます」

——かくれんぼしよう。

短い言葉を、噛みしめるように口にする長治郎の目を、おちかはひたと見つめた。

「それは、大坂屋さんがご存じの方のお声だったんでしょか」  
鯉のぼりの大作りな顔がうなずいた。

「みいちゃんの声でした」

「仲良しの女の子ですね」

「はい、従姉のお道みちでございます。問屋通のなかではいちばん港に近い、一ツ目屋の娘です。手前よりふたつ年上で、よく手前にかまってくれる、おちゃっぴいな姉さんでした」

みいちゃん——と、長治郎は声に出して応じた。どこにいるのと、まわりを見回して何度も呼んだ。みいちゃん、みいちゃん。

——かくれんぼだよ、長坊。

長治郎と仲良しの三人は、外でも内でもよく遊んだ。なかでも、互いの家の奥でかくれんぼをして遊ぶのが好きだった。

そうか、またかくれんぼをするのか。みいちゃんとかくれんぼをするのか。

「息がはずんで、夢のなかでも胸がどきどきいたしました」

さあ、みいちゃんはどこにいる。

すぐ後ろで、戸が閉まる音がした。長治郎が、身体ごとよろめくほどの勢いでぐるりと振り返ると、台所の物入れの引き戸が閉じたところだ。

その引き戸に、ちろりとベロを出すように、紅色の帯の端っこが挟まっていた。

「みいちゃんの帯やと、すぐわかりました」

長治郎は引き戸に駆け寄った。手を伸ばし、指先が帯に触れようというとき、それは内側から強く引っ張られて、さっと消えた。

そして、今度はほんちゃんと呼ばれた。



「その声で我に返りました」

語る長治郎は、びくりと身じろいだ。左手で右肘に触ってみせる。

「手前はおかどさんの御殿で、布団の上に座り込んでおりました。曆のばあちゃん——おきよさんという人でしたが、おきよばあちゃんが手前の肘をこう、つかまましてな」

ぼんちゃん、うわごとを言うとするよ。

「しっかりせいと、手前を揺さぶっていたんでございます」

確かに、長治郎は起き抜けの短い夢を見ていたのだった。だが、とうてい夢とは思われなかった。母親の髪油の匂いは、まだ鼻先に残っている。

大好きなみいちゃんの声も聞こえ、気配も感じた。ほんの刹那だが、懐かしく優しい、幸せだった日々がよみがえった。

「夢は儂いものですが、そのころの手前の心にはまさに千天の慈雨のようで」

懐かしさと共にあらためてこみ上げてきた悲しみを、朝飯と共に噛んで飲み込んで、長治郎はその日の仕事にかかったのだが、

「昼過ぎに、町から米や味噌を運んでくれた網元さんのとこの人が、手前を探しにきました」

身をかがめ、目を合わせてこう告げた。

——おまんは三ツ目屋さんのぼんやろ？ 一ツ目屋さんは親戚やな。

うん、と長治郎はうなずいた。すると男は、ごつい手を彼の頭に置いて、ぐりりとひとつ撫で